

41

山崎宗運の「骨度折量尺」

加畑 聡子

二松学舎大学大学院文学研究科博士後期課程／北里大学東洋医学総合研究所医史学研究室

【山崎宗運の来歴】

山崎宗運〔宝暦11(1761) - 天保5(1834)〕, 名は次善, 字は子政と称す, 代々幕府医官として鍼灸を業とする山崎氏五代目の鍼医である。『寛政重修諸家譜』によれば, 天明2(1782)年に家督を継ぎ, 寛政元(1789)年に寄合より奥医師となり, 同4年には江戸医学館鍼科教諭となった。その後同7(1795)年に法眼となり, 数年で致仕した。著書に『涉園漫録』がある他, 『沈氏積骨』〔寛政10(1798)年山崎宗運跋〕の家刻や『天聖銅人腧穴鍼灸図経彙攷』の校正補注があり, 「銅人形」(東京国立博物館所蔵)を鑄造せしめた人物といわれている。

宗運の事蹟については, 既に第43回日本伝統鍼灸学会総会・学術大会(2015年10月24・25日開催)において「近世日本における医学公教育の形成—経穴学教育を中心に—」と題して口頭発表した。本報告では, 口頭発表の中でも触れた, 『沈氏積骨』(長野仁氏蔵)に附される「骨度折量法尺式」と紙尺(メジャー)について, より詳細な報告をしたい。

【『沈氏積骨』長野仁氏蔵本の付属品】

『沈氏積骨』長野仁氏蔵本には, 12本の紙尺が付属している。紙尺が封入されている紙包みには, 表面には「骨度折量尺 寄所寄楼蔵版」及び「濶狭界尺」, 裏面には「骨度折量法尺式」が木版印刷されている。「骨度折量法尺式」の末に, 「天明丁未冬十月東都 鍼科医官 山崎宗運善記」とあることから, 『沈氏積骨』の家刻以前の天明7(1787)年には既に記されていたことがわかる。

【「骨度折量法尺式」及び紙尺の作成目的】

宗運は, 8つの骨度(「頭围」「胸围」「腰围」「肩至肘長」「肘去腕」「髀枢下至膝中長」「内輔下廉至内踝長」「脊骨以下至尾骶»)が最も計り難く, 後世において, 省略して測定されていることを憂慮し, 研鑽を積んで折量尺即ち同封の紙尺を作成したとしている。また, 人身に老若や大小, 肥瘦があることを踏まえた上で, この紙尺を用いて測定すれば「経旨」の記載と違いなく速やかに分寸が測定できるとした。既述の骨度の測定部位及び分寸は『靈枢』骨度篇と一致することから, 「経旨」とは『靈枢』の記載を指し, それを基本として, 『鍼灸甲乙経』や宗運が校正補注した『天聖銅人腧穴鍼灸図経彙攷』を用いて校勘していることがわかる。

【「骨度折量法尺式」と紙尺の使用方法】

「骨度折量尺」の説明によれば, 紙尺の中でも長尺の8種類, 計10本(「頭围量尺」1本, 「胸围量尺」1本, 「腰围量尺」2本, 「脊量尺」1本, 「肩至肘量尺」1本, 「肘去腕量尺」1本, 「髀枢下至膝中量尺」2本, 「内輔下廉至内踝量尺」1本)を量尺, 短尺1本(「頭胸腰手足法尺」)を法尺, 「脊上下法尺附裏尺」1本を裏尺が付属した法尺としている。基本的な測定方法は, 各部位ごとに, 実際の分寸を量尺で測定し, その数値を法尺に置き換えた長さを一尺とするものである。これにより, 「経旨」すなわち『靈枢』の記載に準じたそれぞれの部位の一尺を求めることができ, それを基準として取穴するのである。また, 脊椎は, 裏尺が付属した法尺を用いて, 上七節と下十四節に分けて測定し, 各脊椎間の距離を求める。また, 一尺以下の測定部位は, 「濶狭界尺」を直接当てることによって分寸を求める。

【考察】

これらのことから「骨度折量尺」は, 医学の経典として尊ぶべき『靈枢』における分寸及び取穴法に接近することを目的としたものであり, 当時の度量衡を『靈枢』記載の骨度法に変換するための手段として製作されたと言える。

本研究は, 武田科学振興財団2013年度杏雨書屋研究奨励「江戸医学館を中心とした近世後期の医学公教育の形成」の一部である。